

詩の世界

月宮悠人

静の冬、動の春

雪が降る。

雪はどれだけ風に流されようと、大きさが違おうと、大地や屋根、植物や車に至るまで、全てに平等に積もる。

雪が降る。

朝日に照らされた雪原は、一面目が痛くなるほど輝く銀世界となる。それは純白で純粋で、まるで世界はリセットされたかのようなようだ。

雪が降ったばかりの、新雪の雪原を歩く。

自分だけの歴史を踏み歩む。

雪が止み、銀白と静寂と月明かりの新世界に、今、ここに私だけがいる。

雪が溶ける。

草花が真白の世界から現れ、色とりどりの世界が広がってゆく。

雪が溶ける。

どこからともなく動物たちが現れ、新春を祝い、はしゃぎ、新しい世界で嘶く。

春の心地良い風を肌で感じ、草花の香りを全身に纏う。

新しい生命の息吹をこの目で、肌で、全身で実感する。

今、この瞬間、新しい息吹と共に、私が始まる。

それは過去現在〈今〉未来

一つ、一つ、積み上げていく。

それは一つ、一つ、形が違う。

それは全て同じ。

それは人、歴史、世界。

一つ、一つ、崩れていく。

それはあっという間に。

それは全てが。

それは時間、物、繋がり。

一つ、一つ、確かめる。

それは一つ、一つ、丁寧に。

それは全てを。

それは絆、友情、団結。

一人、一人、見つめる。

それは一人、一人、認め合う。

それは全てに。

それは愛、勇気、希望。

次へ、次へ、伝え繋ぐ記憶の連鎖

人間は 忘れる生き物だ

だからこそ 忘れないようにする

だからこそ 次を歩める

それからは 後世に伝えよう

そこからは 青年の時代だ